

総論

早稲田大学 政治経済学部

国語

| | | | | | | | |
|--------|----------------|--------|-----|---------|-----|--------|-------|
| 満点 | 70点 | 目標得点 | 50点 | 試験時間 | 90分 | 偏差値 | 政治 75 |
| 大問数 | 3 (古漢融合1・現代文2) | 小問数 | 26 | 経済/国際政経 | 74 | | |
| [解答形式] | 選択式 | 20/26問 | 記述式 | 5/26問 | 論述式 | 1/26問 | |
| [難易度] | C | 2/26問 | B | 11/26問 | A | 13/26問 | |

※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す

Topics

- 1…(古漢融合)長文化が著しいが、設問数は昨年と同じ。漢文訓読調の文章であったので、幅広い時代・ジャンルの古文に接しておくことが求められた。漢文は標準的。
- 2…(随筆) 寺田寅彦の随筆で、やや古い時代の文章からの出題は例年通り。
- 3…(評論) 過去に同大学第一文学部小論文に既出。二項対立の明確な文章。漢字の読み取りで「未曾有」が問われた。

「こんな力が求められる!」

(古漢融合)「融合」とはいえ、ほぼ独立の問題が出題されるのは例年通り。基本的な文法・単語の学習・習得が求められるのは当然。近世文学・軍記物語・芸能論など中古文学以外の古文にも接しておく必要がある。漢文では、基本句法の習得・語彙知識が必須。

(随筆) やや古い時代の文章からの出題が続いている。明治・大正などの随筆・評論などに慣れ親しむこと。過去問の演習が効果的。

(評論) 社会科学全般からの幅広い出題が見られる。「文化論・芸術論・言語論・科学論・政治論・哲学的文章」などで、自身の不得意なジャンルをつくらないことが重要。日頃から高い問題意識を持って現代文に取り組む姿勢が求められる。

大問別分析

〔一〕

| | | | |
|------------|--|---------|--------|
| 予想配点 | 30/70点 | 時間配分の目安 | 30/90分 |
| 文章の種類/ジャンル | 現代文・古文・漢文・古漢融合 / (古文) 仮名草子・(漢文) 史書 | | |
| [出典] | (古文) 『是楽物語』(漢文) 『春秋左氏伝』 | | |
| [文字数] | (古文) 約二四〇〇字 (約八五〇字増) | | |
| 『あんころ』レベル | ★マーク付きの語彙レベルで対応可。 | | |
| 出題形式 | マーク9・記述3 (空欄補充(語句抜き出し)・書き下し(送り仮名のみ)・白文返り点) | | |
| 小問別難易度 | ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す | | |
| 問一 A | 問二 B | 問三 A | 問四 A |
| 問七 C | 問八 B | 問九 A | 問十 A |
| | | 問十一 A | 問十二 B |
| | | | 問五 B |
| | | | 問六 C |

お茶ゼミカリキュラムとの関連

(古文) 一学期に近世文学を学習。夏期講習古文読解上級ゼミ・冬期講習難関大古文ゼミ・直前特訓の「早稲田の国語」は必須。
 (漢文) 基本的句法の習得が必須。スポーツ授業及び夏期講習の漢文基礎は必須。

●解答のポイント&学習対策等

- 問一 【傍線部解釈・選択】A「不祥」がポイント。第四段落目に「楚に害あらん祥なり」とあるのがヒントとなった。C「意入れ」「えく打消」「長短」がポイント。D「徳」がポイント。荘生が恩赦を促した点を後文から読み取る。
- 問二 【空欄補充・選択】「不肖」とはここでは「愚かなこと。取るに足りないこと」。
- 問三 【文法】基本的な問題。「見出されないもの」という設問の要求に注意。
- 問四 【指示人物判断】「寡人」は諸侯のへりくだりの自称。
- 問五 【空欄補充・抜き出し】第四段落目八行目で「心に金を惜しむ事を知りて…」とあることに着眼する。第二段落では「千金」とある。※「数百金」は父から渡された金とは別に自身で用意したものの。荘生に渡したものでないので、「惜しむ」対象ではない。
- 問六 【空欄補充】難問。四字熟語の知識。「漢璧」等習った熟語は確実に身につけること。長男が「宝の得難き事を知れり」と少子が「宝の得難きところを知らず」から考える。
- 問七 【内容一致】第二・六段落目の読解がポイント。読解の速度と正確さが求められた難問。
- 問八 【文学史】近世文学は前後関係もおさえる。
- 問九 【傍線部解釈・選択】「疾」がポイント。
- 問十 【再読文字】「猶」の書き下しの問題。句法の基本中の基本。
- 問十一 【返り点】直前部「猶石田を獲るがごとし」が理解できれば、「ここには用いる所がない」といった解釈は容易に読み取ることができる。読み方はいずれも基本的。
- 問十二 【内容一致】「諫めて曰く」以降の主張をおさえる。前問で齊を「石田」と例えていたこともヒントになる。

【三】

| 予想配点 | 20/70点 | 時間配分の目安 | 25/90分 |
|----------------|---|---------|--------|
| 文章の種類/ジャンル | 現代文・古文・漢文・古漢融合 / 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他 | | |
| 【出典】 | 寺田寅彦『蓄音器』 | | |
| 【文字数】 | 二三〇〇字(約一〇〇字増) | | |
| 出題形式 | マーク7・記述1(漢字書き取り) | | |
| 小問別難易度 | ※問題難易度:C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す | | |
| 問十三 | 問十三 B 問十四 B 問十五 A 問十六 B 問十七 B | | |
| 問十八 | 問十八 A 問十九 A 問二十 B | | |
| お茶ゼミカリキュラムとの関連 | 明治・大正期の随筆は六月期・七月期・夏期講習現代文上級ゼミ・現代文標準ゼミでそれぞれ学習。 | | |

●解答のポイント&学習対策等

- 問十三 【傍線部理由説明・選択】第一段落から第三段落が導入部。三段落で「私自身と蓄音機との交渉の歴史のほうが多く痛切で忘れ難いものである。」とある。「自己の歴史」に関する言及が必須。
- 問十四 【空欄補充・副詞的語句】それぞれ a ↓、b ↓ハ、c ↓イ、d ↓ホ、e ↓へ。

- 問十五 【漢字書き取り】
- 問十六 【傍線部理由説明・選択】「あてはまらないものをく二つ」選ぶ点に注意。「ハ、く意味がくわからなかった」のであれば問十七の「滑稽さ」にはつながらない。「ホ、外国語のような発音」で民謡を歌うとは思われない。
- 問十七 【空欄補充問題・選択】第六段落の「異常な緊張が講堂全体に充満していた」という記述に注意。そこへ、民謡が高唱され、緊張感が解けたのである。
- 問十八 【漢字・選択】「くを与える」に続くものを選ぶ。
- 問十九 【語義・選択】ハもあるが、ここではロ。
- 問二十 【内容一致・選択】前段落「あの時にあの罪のない^{りやう}俚謡から流れ出た自由な明るい気持ちはく今日までくしゃちこ張りたがる気分にくとりを与える。」に着眼。

【三】

| | | | |
|------------|-----------------------------------|--------------------|--------|
| 予想配点 | 20/70点 | 時間配分の目安 | 35/90分 |
| 文章の種類／ジャンル | 現代文・古文・漢文・古漢融合／ | 評論・随筆・小説・物語・詩歌・その他 | |
| 【出典】 | 藤田省三「『安楽』への全体主義」(『全体主義の時代経験』所収) | | |
| 【文字数】 | 約三一〇〇字(約三〇〇字増) | | |
| 出題形式 | マーク4・記述2(漢字読み取り1・内容説明1) | | |
| 小問別難易度 | ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す | | |
| 問二十一 A | 問二十二 A | 問二十三 B | 問二十四 A |
| | | | 問二十五 A |
| | | | 問二十六 B |

お茶ゼミカリキュラムとの関連

「快・不快」をめぐる問題をあつかった現代社会批判の文章は五月期に中村雄二郎『正念場』森山公夫『和解と精神医学』などで学習した。論旨も共通する点が多く、お茶ゼミでの現代文学学習の理解・復習が高得点につながったと思われる。

●解答のポイント&学習対策等

- 問二十一 【漢字読み取り】「みぞゆう」ではない。
- 問二十二 【空欄補充・選択】空欄部直後「く的な交渉」に続く点に注意する。
- 問二十三 【空欄補充・選択】第六段落一行目に「一つの効用のためだけに使われる場合の物は、くまた、空欄部直後「それに対しては使いそして捨てる他ない。」とある。
- 問二十四 【空欄補充・接続表現】接続表現は前後の内容に留意する。1は三行目「しかし」と呼応する譲歩の構文をつかむ。
- 問二十五 【内容一致・趣旨】「合致するものを、く三つ」選ぶ点に注意。ロは「人間にとって自然」、ホは「人間社会の基本的なあり方」へは「人間的な価値を生み出す源泉となりうる」がそれぞれ筆者の考えに反する。
- 問二十六 【内容説明・記述】本文全体としてXとYとの二項対立を軸に論が展開している。まず、設問から求められる解答形式を決める。ここでは「前者はくが、後者はく。」次に、「『経験』との関わり」を確認する。第五・六段落に着眼すると「前者は経験を生まないが、後者は経験を生む。」となる。最後に、本文において「不快」への態度が論点になっている点に着眼し、第一段落一行目「不快の源そのものを追放しようとする」や第五段落「試練に耐え克服して道筋を歩みきった時」などをおさえる。

(解答例)「前者は不快を追放し経験を生まないが、後者は不快に耐え克服して経験を生む。」(二十六字)